HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識 : 北海道の園芸・酪農地域を対象に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	福澤, 萌
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第13267号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71207
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Moe_Fukusawa_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称　博　士（農学）　　氏名　福澤　萌

審査担当者　主　査　准教授　小　林　国　之
副　査　教　授　坂　下　明　彦
副　査　教　授　柳　村　俊　介
副　査　准教授　朴　　紅

学 位 論 文 題 名

流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識
−北海道の園芸・酪農地域を対象に−

本論文は序章、終章を含む6章からなり、図 28、表 44、文献 81 を含む総頁数 114 の和文論文である。別に 1 編の参考論文が添えられている。

北海道での農業就労を目的に移住した「移動性・季節性・肉体労働」を持つ農村の働き手「流動的農村労働者」を対象とし、現在の流動的農村労働者の実態を、労働主体の視点から明らかにした。労働者は年齢を経過するにつれて仕事と生活のバランスが変化する生活者でもあるという前提に立ち、流動的農村労働者を対象として、経済的位置（①給料・手当、②仕事内容）と、社会的位置（①仕事のやりがい、②生活環境、人との関わり方）を整理した上で、各主体の「位置」に対する意識を明らかにした。

序章は農業雇用労働力、労働経済学の既存研究をもとに上述の分析視角を措定した。第1章は北海道の園芸・酪農地帯での労働の特徴について統計資料をもとに整理した。園芸地帯では、雇用労働力を必要とする栽培管理・選別調整作業において労働力の調達や集出荷施設の整備を農協が中心となって取り組むことで地域農業の組織化を進めた。酪農地帯は専業化の進行、飼養頭数の拡大、それに伴う労働時間の上昇を招いており、搾乳や牧草作業の支援組織が拡大していることを明らかにした。

第2章では、富良野地域の雇用労働力需給動向を明らかにし、農作業ヘルパー事業の概要を整理した。農作業ヘルパーの大半は農業経験年数が短く作業熟練度に差があるため、単純作業を行う労働力として位置付けられ、作業内容は農協で取り扱う青果物の収穫・管理作業全般を担っている。

第3章は流動的農村労働者である農作業ヘルパーの就業動機と経済的位置と社会的位置および意識をアンケート及び聞き取り調査から明らかにした。就業動機は、①農業志向型、②賃金重視型、③地域・農業経験重視型、④偶発的就業型の4グループに分けられ、リゾートバイトとしての短期就業以外にも、農業体験や農業を職業とするためのステップ、移住を考えての就業などが明

らかとなった。

経済的位置への意識について、賃金体系に対しては、手当の充実に満足しながら、天気に左右される月収の差、就業者が負担する経費（滞在費）への不満が示された。また農作業自体への意識については、不満（ハウス内作業での暑さなど）はあるが、それ以上に収穫作業の価値を感じる内容であった。

農家・寮生活・農協職員との人間関係に関しては、相手によって影響を受けるが、気が合う農家に合うことを目的として継続して就業している者もいた。

第4章は酪農ヘルパー組織の概要について整理を行った。酪農ヘルパー組織は周年拘束性が高い酪農家の休日確保の支援組織として、1990 年以降に設立された組織である。特定多数の牧場を顧客としているため、牧場ごとのレイアウト、飼養管理に関する多様な情報を保有している組織でもある。また酪農ヘルパーは、就農希望の若者や酪農に興味がある者、そして農家子弟が就農までの期間に経験を積むことを目的として就業する者が中心であった。

第5章では、こうした酪農ヘルパー組織の職員を対象に就業時の社会・経済的意向と就業してからの意向に対しての価値観の変化、就業継続可能性について分析した。

経済的位置としては、酪農家の休日確保の要望の高まりから、酪農ヘルパーへの必要性が増し、賃金や保障は整いつつある。社会的位置に対しては、酪農家と職場との関係性の構築の有無、就業時間の不規則性から生じる孤立性と、それにともなう体調への影響、酪農飼養の能力を発揮する機会の制限が影響を与えていることが明らかとなった。

終章では，とりあげた事例を序章で設定した分析視角である「流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識」について各事例の客観的事実とその事実に対する当事者の意識を整理した。農村人口減少が急速に進み、農業被雇用労働力が、賃金確保としての出稼ぎという立場から、農村への魅力を抱く人たちの就業の場としての立場に変化している。これまでの労働現場が求める枠組みに該当する対象者の選抜ではなく、「不安定・低賃金」である環境をあえて選択してきた労働者の意識を汲み取る必要があると考える。

多様な働き方、仕事と生活とのバランスを取った働き方に対するニーズは今後も増加していくことが想定されている。本論文の結果から農業が経済的目的以外に、さまざまな働く上での喜びを提供できているという実態が明らかとなった。新たな働き方に向けて様々な取り組みがなされているいま、労働力を受け入れる農業・農村側としては、こうした働く側の意識（やりがい）の多様性を認識し、彼らの存在を位置付けた上で、様々な労働力確保の取り組みを実施していくこと画筆ようであることを明らかにした点で、本研究は重要な意義を有している。

よって、審査員一同は、福澤萌が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。